

特集展示

源氏物語と大津

P1～P3

コラム

本福寺門徒に伝わる
「無導光本尊」

P4～P5

収蔵品紹介

保永堂・栄久堂板 近江八景之内
比良暮雪 歌川広重画

P6

大津 歴博 だより

2023

No.

132



大津市歴史博物館

令和5年12月10日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

特集展示 源氏物語と大津

会期：令和6年(2024)1月10日(水)～令和7年(2025)2月2日(日)



源氏物語色紙「若紫」 土佐光吉筆 紙本金地著色 安土桃山時代(16世紀～17世紀) 石山寺蔵

今や世界中で愛される『源氏物語』。その中でも、主人公の光源氏が初めてヒロインである紫の上を目にする「若紫」は、最も有名な場面の一つとされます。作者の土佐光吉(1539～1613)は、大和絵を主とする土佐派の絵師で、『源氏物語』に取材した作品を多く手掛けました。

「源氏物語と大津」開催前夜

それは昨年(2022年)の5月のことでした。2024年の大河ドラマが「光る君へ」と題し、紫式部を主人公にしたものになるというニュースが流れたのは。大津市には、紫式部が『源氏物語』を書き始めた場所として伝わる石山寺があり、当時の私は「何か展示しないとかなあ」程度にしか考えておりませんでした。それがまさかこんなことになるとは・・・。

それから2、3ヶ月後のある日、大河ドラマの放映に合わせて、当館の常設展示室を改修し、約1年間にわたって『源氏物語』や紫式部に関する展示を行うことが決まったのです。

そこからは怒涛の日々でした。早急に次年度予算を組まなくてはなりませんが、展示の概要書を一から作るところから始まり、それをもとに様々な経費の見積りを依頼して予算書を作成し、それがひと段落ついたら10月が終わっていました。休む間もなく、次の仕事として実際に展示の中身を具体的に決めていかなければなりません。しかし、当館には『源氏物語』や紫式部にちなんだ作品というのは少なく、とても1年間展示を行うだけの質・量ではありませんでした。

「源氏物語と大津」開催に向けた調査

そこで、『源氏物語』や紫式部に関する資料を数多くお持ちの石山寺にご協力をお願いし、石山寺の所蔵品を中心に、展示を構成することになりました。となると必要になるのが、石山寺の所蔵品の調査です。

石山寺には、『源氏物語』や紫式部に関連する資料が数百点規模で伝えられており、石山寺文化財総合調査団によって、現在も調査が継続して行われています。当館としては、石山寺のご協力のもと、調査団が未着手の部分を中心に調査団による調査の補完として調査を進めていきました。その結果、これまで知られていなかった資料も数多く見出されました。

そこで本展では、石山寺の所蔵品で著名なものはもちろんのこと、新たに見出された資料についても積極的に展示し、石山寺を中心に、『源氏物語』と大津の関わりについて紹介していきたいと思っています。

知られざる紫式部図の数々

さて、石山寺と『源氏物語』や紫式部といわれて、恐らく皆さんの共通イメージとして思い浮かぶのが、石山寺が所蔵

する土佐光起(1617～91)筆「紫式部図」だと思います。紫式部のメインビジュアルとしてよく目にする作品ですが、残念ながら損傷等の影響で修理する予定のため本展には出陳されません。ですが皆さん、ご安心ください。石山寺には、土佐光起筆の紫式部図が、次頁のとおり他に3点も伝わっていて、さらには息子の土佐光成(1647～1710)の作品までもあります。

これら以外にも、狩野孝信(1571～1618)や清原雪信(1643?～82?)といった狩野派の他、様々な絵師によって描かれた紫式部図が収蔵されています。本展示では、スペースの都合上すべてを展示することはできませんが、注目作品を厳選して展示する予定ですので、この機会にぜひ多様な紫式部図をご覧いただきたいと思います。

少しずつ見えてきた、石山寺=『源氏物語』の聖地

本展は、石山寺で紫式部が『源氏物語』を書き始めたという伝承を出発点としています。史実として、紫式部が石山寺にきた記録というものはありません。しかし、①当時石山寺に参詣するのが貴族のブームだった、②特に女性作家(藤原道綱母、和泉式部、菅原孝標女など)も多く参詣していた、③紫式部が仕えていたとされる藤原道長夫妻は頻繁に石山寺へ参詣しているなどの点をみれば、当時から文化人として著名だった紫式部が石山寺に参詣した可能性は十分考えられます。

それでは、具体的にどのように石山寺が『源氏物語』起筆の場として定着していったのでしょうか。石山寺に伝わる重要文化財「石山寺縁起絵巻」巻4には、紫式部が『源氏物語』を書くきっかけとなった縁起が見られます。それによると、紫式部が彰子(道長の娘で一条天皇の中宮)に仕えていた時に、選子内親王(村上天皇の第10皇女)から彰子のもとに珍しい物語が求められ、彰子は紫式部に新たな物語の執筆を命じました。紫式部が執筆の祈願のため石山寺に1週間籠って祈り続けていたところ、琵琶湖がはるばると見渡せて心が晴れやかとなり、様々な情景が目に見えられました。しかし、近くに紙が無かったので、『大般若経』の裏に書き付けました。これが『源氏物語』の始まりと記されています。この詞書に続く絵を見てみると、御簾をよけて遠くを見る紫式部と、湖面に映る月が4紙にも渡って広々と描かれています。

実際に紫式部がどこで『源氏物語』を書いたのか詳細は不明ですが、鎌倉時代に入るとこのような『源氏物語』の起筆伝承というものが語られるようになります。しかし、

初期のものには選子内親王からの依頼で、彰子が紫式部に新しい物語の執筆を命じたことのみ記されます。石山寺を起筆の場とするのは、南北朝時代から室町時代にかけての公家である四辻善成(1326～1402)による源氏物語の注釈書『河海抄』が著名です。この中では、「石山寺縁起絵巻」に記される石山寺起筆伝承が記されています。この『河海抄』に記される起筆伝承が、「石山寺縁起絵巻」と並んで現在広く知られているものでしょう。

そして、その起筆伝承が広まったひとつのきっかけが、三条西実隆(1455～1537)という室町時代の公家の存在だったと考えられます。『実隆公記』という60年以上も書き続けた日記が著名ですが、文学の世界では歌人としても著名で、かつ『源氏物語』の注釈書も執筆しており、天皇・将軍・公家・武家に広く『源氏物語』の講釈を行っています。また、実隆は生涯で何度も石山寺に参詣しており、和歌を詠み奉納しています。さらに子の公条(枝)、孫の実枝の3代に渡って相次いで『源氏物語』の注釈書を著しており、室町時代には実隆の家系を中心に『源氏物語』の講釈が行われました。

ここで注目したいのが、先に紹介した紫式部による『源氏物語』起筆の場面が描かれる『石山寺縁起絵巻』巻4です。この巻は明応6年(1497)に制作されており、その実隆が詞書を執筆しているのです(重要文化財「石山寺縁起絵巻」は全7巻として伝わりますが、鎌倉時代末に作り始めた際は3巻のみで、徐々に描き足されて現在の形になったとされます)。詞書そのものについては制作当初に成立していたとされますが、室町時代における『源氏物語』の第一人者たる実隆が『源氏物語』の石山寺起筆伝承の場面の詞書を書いたことは、ある意味その伝承に権威付けがされたと見ることができます。それは、子である公条にも引き継がれ、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の前関白九条植通が土佐光元に描かせた「紫式部観月図」には公条による讃があり、石山寺起筆伝承が記されています。

この三条西家による起筆伝承の流布の影響は、藤原定家以来の新しい古典として、江戸時代を通じて多くの文化人が実隆にならい石山詣を行い、和歌を奉納していることからもうかがえます。それと呼応するように、紫式部の肖像や起筆の場面を描く観月図が数多く制作されるようになったと考えられます。

「源氏物語と大津」開催まであと少し!!

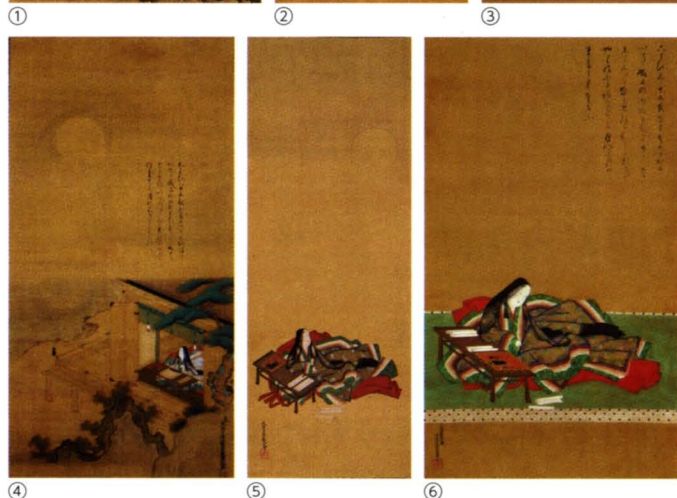
特集展示「源氏物語と大津」は、「光る君へ」の初回が

放映(令和6年1月7日予定)されたすぐ後の令和6年1月10日(水)から、大河ドラマが終わって余韻に浸った後の令和7年2月2日(日)まで開催する予定です。会期中は6期に分けてほぼ全て展示替えを行います。また、ロビーではフォトスポットやデジタルコンテンツを設置し、広い世代の方々に楽しみながら『源氏物語』に親しんでもらう趣向も計画しており、さらに、本展に合わせたオリジナルグッズも鋭意製作中です。

そして、石山寺では豊浄殿での展示に加えて、大河ドラマ館が設置され、平安文化に関する展示も行われます。また、紫式部の父である藤原為時が出家したと伝わる三井寺でも、紫式部や『源氏物語』にちなんだ特別公開が行われる予定です。

この機会に、ぜひ紫式部や『源氏物語』と大津の関係について知っていただき、大津の豊かな歴史と文化を体験していただければ幸いです。

(学芸員 鯨井清隆)



- ① 紫式部観月図 土佐光起筆 江戸時代 石山寺蔵
- ② 紫式部図 土佐光起筆 江戸時代 石山寺蔵
- ③ 紫式部図 土佐光起筆 江戸時代 石山寺蔵
- ④ 紫式部観月図 土佐光成筆 江戸時代 石山寺蔵
- ⑤ 紫式部図 土佐光成筆 江戸時代 石山寺蔵
- ⑥ 紫式部図 土佐光成筆 江戸時代 石山寺蔵

本福寺門徒に伝わる「無尋光本尊」^{むげこうほんぞん}

10月7日(土)から11月19日(日)まで当館で開催した親鸞聖人生誕850年記念企画展「近江堅田 本福寺」^{かた た}では、本福寺の貴重な法宝物^{ほうぼうもつ}(浄土真宗の教えに関わる宝物)を一堂に展観しました。それに加えて、本福寺だけではなく、その門徒に伝来した法宝物も何点かご出陳いただくことができました。今回はその中から、本福寺門前の門徒に伝わった「無尋光本尊」と呼ばれる形式^{じょうじ}の十字名号^{みょうごう}についてご紹介します【図1】。

「無尋光本尊」とは？

本福寺門前の門徒のお宅には、阿弥陀如来絵像、墨書六字名号、そして今回ご紹介する無尋光本尊(以下、本図)の3点の法宝物が伝わっています。この個人宅の家系は、本福寺所蔵の中世記録「本福寺跡書」^{あとがき}の「本福寺毎年十二月之念仏御頭之事」で11月分を担当したと記される「大北兵衛」^{おおきたひょうえ}の子孫にあたると思われる、有力な本福寺門徒でした。これらの法宝物も大北兵衛の道場(門徒の集会場所)に伝来したものである可能性があります。

まずは、本図を見てみましょう。^{れんたい}蓮台(蓮の花の台)の上に「歸命盡十方無尋光如来」の十字を表し、その周囲に48条の光明(光の線を表現しています)を描きます。「歸命」とは「皈依する」という意味で、「盡十方無尋光如来」は阿弥陀如来の別称です。つまり「歸命盡十方無尋光如来」の十字で、阿弥陀如来への皈依を強調していることになります。名号の上下には3つの区画に分けた色紙型を配し、上部には『無量寿経』、下部には『浄土論』を讃文として記します。彩色などの保存状態は比較的良好ですが、本図向かって右下部は後補の絹に替わっています。

このような形式をもつ名号は、本願寺蓮如上人(1415～99)が考案したものとされ、無尋光本尊と通称されます。蓮如上人は室町時代に本願寺住持として活躍し、本願寺を浄土真宗の中心勢力となるまで発展させた人物です。無尋光本尊は、蓮如上人が本願寺住持を継職した後の長禄2年(1458)から、本願寺が延暦寺によって破却(「寛正の法難」)される寛正6年(1465)までを中心に末寺の本尊として下付されました。

本福寺は、第3世住職の法住が蓮如上人と密接な関係を持ったことから、湖西の本願寺門流の重要拠点として



【図1】十字名号 絹本著色 江戸時代 個人蔵

成長していきます。ですから、本福寺の門徒にこのような無尋光本尊が伝わっているのは、一見ごく自然のこのようにも思えます。

ところが、無尋光本尊は、絹に描かれ、丁寧な彩色や金を伴う非常に豪華な法宝物で、普通は本願寺配下の

有力寺院にだけ与えられるものです。本来であれば、本福寺の門徒、つまり本願寺の門徒のそのまた門徒に与えられるものではありません。このような無尋光本尊が個人宅に伝わっているというのは本当に珍しいことで、他に同様の事例は知られていません。展覧会の準備のためにお宅に伺って、本図を拝見した時には、とても衝撃を受けるとともに、なぜこんなにも立派な無尋光本尊が個人のお宅にあるのかと、頭を抱えてしまったことをよく覚えています。

「無尋光本尊」が語ること

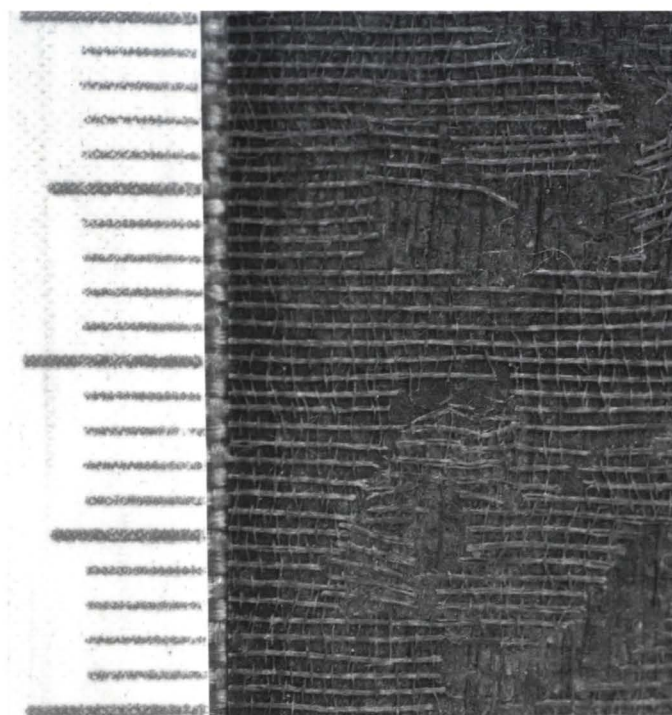
では、本図は、いつ作られたもので、なぜこのお宅に伝来したのでしょうか？

無尋光本尊は基本的に蓮如上人あるいはその跡を継いだ実如上人(1458～1525)の頃、つまり室町時代にしか制作されませんでした。短い期間しか作られなかったのは、寛正6年(1465)の「寛正の法難」の時に比叡山延暦寺から無尋光本尊を強く批判されたからです。したがって、本図も蓮如や実如の時代のものと考えたいところですが、それは少し難しいところがあります。

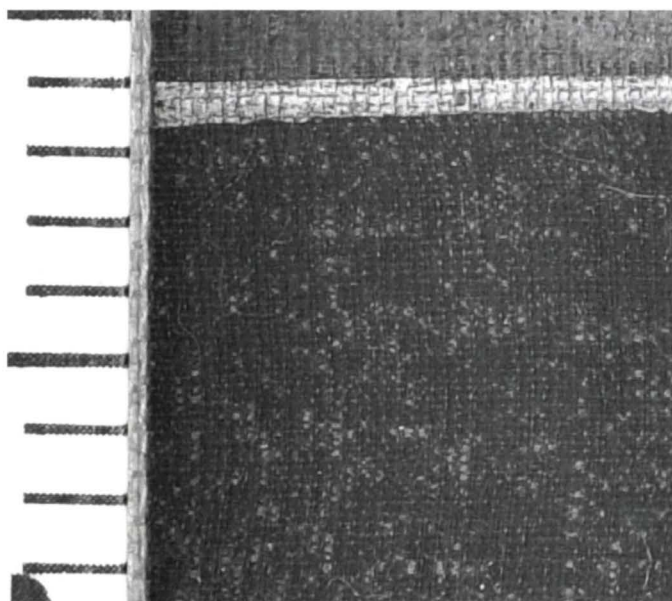
実は、室町時代の絵絹は、絹目が粗いという傾向があります。例えば、本福寺所蔵で長禄4年(1460)に蓮如から与えられた十字名号の絹の拡大写真【図2】を見ると、上記の傾向が見て取れます。一方で、本図に用いられている絹の拡大写真【図3】は絹目が非常に緻密で、その違いは一目瞭然です。これだけ違うととても近い時代のものとは言えません。本図のような緻密な絵絹は、江戸時代によくみられるものです。

さらに、個人蔵の無尋光本尊にはやや線にゆがみがあります。例えば、上下の讃文と絵の境界線がやや右肩下がりである点などです【図1】。現在知られている蓮如上人や実如上人の時代に制作された無尋光本尊にはこのようなゆがみは見受けられません。

以上の点を総合して考えると、本図は、やはり室町時代までさかのぼるものではなく、江戸時代の初め頃に蓮如の時代に制作された無尋光本尊を写して作られたのではないかと推測できます。もしこの推測が当たっているとすれば、このような精巧な写しをわざわざつくるきっかけや、どこの無尋光本尊を写したのかなど、様々な興味深い問題が浮かんできます。特に、上下の讃文の筆跡は蓮如上人の筆跡に非常に近く、手が込んでいます。これらの点については、今後の課題です。



【図2】十字名号(部分) 本福寺蔵 ※1目盛=1mm



【図3】十字名号(部分) 個人蔵 ※1目盛=2mm

本福寺門徒の奥深さ

ここまで、堅田の個人蔵十字名号から考えられることを述べてきました。このお宅には、本図だけでなく阿弥陀如来絵像、墨書六字名号が伝わっており、阿弥陀如来絵像は室町時代の作、墨書六字名号は蓮如上人自筆のものです。かつての本福寺の有力門徒につながるお宅とはいえ、中世の法宝物2点に加え、無尋光本尊までもが残るというのは、稀有なことです。堅田というところの由緒の深さや、人々の信仰の篤さが垣間見える事例と言えるのではないのでしょうか。今後も、本福寺とその周辺の宗教空間の奥深さをご紹介していきたいと思います。

(学芸員 柘植健生)

保永堂・栄久堂板 近江八景之内 ^{ひらのぼせつ} 比良暮雪 歌川広重画 (縦 25.7cm、横 38.1cm)

海外で、「霧と雪と雨の芸術家」と例えられたように、歌川広重(1797～1858)の表現した浮世絵風景版画の世界は、情趣の魅力にあふれています。広重は30代後半にして名所風景版画の仕事で成功し始めましたが、近江の名所風景はその頃から最晩年にいたるまで手がけ続けています。

中でも傑作のひとつに数えられる保永堂・栄久堂板の近江八景之内は、従来の名所絵としての近江八景とは異なり、広重の視点で捉えた実景をもとに、臨場感あふれる風景画に近くっており、革新的な近江八景を表現しています。

この度、当館では、保永堂・栄久堂板のうち栄久堂板の「比良暮雪」を収蔵することができました。同板の八景の中では、唐崎夜雨とともに最も評価が高い情景で、琵琶湖の湖西にそびえる、雪化粧した1100m級の比良山系(主峰は武奈^{ぶな}嶽^{だけ} 1214m)を中心に据えた構図で描かれた作品です。

ちなみに、保永堂・栄久堂板の近江八景および「木曾海道六拾九次」などの制作にあたっては、広重は事前に写生旅行として各地に赴いており、現地写生を行いました。その成果であるスケッチブックのいくつかが現在、大英博物館に残されているのですが、唐崎^{からさき}や大津柴屋町^{しばやまち}のスケッチなども確認されています。

他にも、近江の各所を訪れ写生していることが同スケッチ

ブックから判明するのですが、残念ながら、現存する冊子には比良暮雪のスケッチはありません。もっとも、保永堂・栄久堂板に描写される八景の各景観は、基本的に実景に即したものとなっているので、比良暮雪についても、広重は現地へ赴き、湖辺に迫る山体の威容を、眼前で写生した可能性が高いといえます。

であればこそ、この栄久堂板の比良暮雪において広重は、それまでの日本の名所絵にはほぼ見られなかった厳しく雄大な山岳表現によって比良山系を描くことが出来たのでしょう。迫真的な険しさを、情景のひとつとして近江八景に加えたのです。

(学芸員 横谷賢一郎)



参考図版：近江八景図のうち比良暮雪 土佐慶琢筆 18世紀 本館蔵

※従来の名所絵表現による比良暮雪。穏やかな山肌と山容で描かれています。



栄久堂板 比良暮雪 歌川広重画 天保6年(1837) 本館蔵

雪はる、
ひらの高根の
花の 夕ぐれは
さかりに
すぐる
ころかな

※濁点は筆者

左上の色紙型の和歌は、^{このえ}近衛信尹(1565～1614)が詠んだ近江八景歌